〈追悼文〉

野村俊明教授への感謝

読売新聞東京本社常務取締役
南　砂

野村先生の早過ぎる訃報に接した時、あの温かな笑顔とお人柄に再び接することができないこと、そして何より、直接先生にお礼を申しあげる機会がなくなってしまったことの無念さで胸が一杯になりました。野村先生と初めてお目にかかったのは2016年３月のことでした。長年の懸案であった私の博士論文について先生にご意見を伺うため、大久保善朗・日本医科大学精神神経科学講座主任教授（当時）がご紹介下さったのです。

私の研究は1983年に中曽根政権が打ち出した「留学生受け入れ十万人計画」の下で日本政府が急速に受け入れを増やした「国費留学生」がテーマでした。異文化との摩擦で生まれる心理学的、精神保健学的問題への対応の糸口を探ろうと、80余人を対象に心理テストを実施し解析した研究が始まりでした。その結果を遠藤教授のご指導でまとめ、1993年夏、国際会議で発表する機会を頂きました。発表の場には当時の遠藤教授だけでなく廣瀬名誉教授もご臨席下さいました。その後、論文化を進める予定でしたが、様々の事情で作業が滞りました。21世紀初頭にはあらたなデータも加えて再度まとめたものの、遠藤教授の任期中に出せず、大久保教授に引き継がれました。医学の研究や論文を巡るルールがこの間に大きく変わり厳格化したことも遅滞の一因になりました。

野村先生は私の話を丁寧に聞き、旧いデータにも目を通して下さったうえで、解決への方策を様々ご検討下さいました。当初、先生は、30年前の調査を捨てて、新規に最低20人くらいの元国費留学生を追跡してみてはどうかと、あらたな調査研究を構えることを薦められました。それが最速の道であり２年くらいで論文を完結させることができるだろうと言われたのです。しかし、十万人計画当初の調査は私には特別な思い入れがあり、容易に「捨てる」ことは出来ませんでした。

野村先生はそんな私の気持ちも汲んで様々の可能性と提案をして下さり、何とか論文に結実できるようご支援下さいました。教育・研究と臨床とにお忙しい中、留学生現場からご協力下さっていた千葉大学国際センターの新倉涼子教授とも議論を重ね、試行錯誤を繰り返した結果、2019年夏、あらたな調査事業が動き出しました。先生とお会いしてから3年余りの時間が経過していました。この間、何度となく交わされたやりとりを通じて、先生はいつでも穏やかで誠実に、しかしながら研究の現実的なかたちと着地点を常に丁寧に探り、周到な計画を描いて下さったことを忘れることができません。これを学位論文として結実させることができたのは偏に、大久保、野村両教授と、医療心理学教室の樫村正美准教授の懇切なるご支援のお蔭でした。

1980年代に来日した、十万人計画当初の国費留学生を対象とした30年の縦断調査が決まり、早速、連絡可能な当時の元留学生に協力を呼びかけたところ、思いがけないほど多くの元留学生が調査に協力したいと言ってくれて、2020年春、100人あまりの元留学生を対象とした調査を実施することができました。解析後、論文化を進め、大久保教授の「ご卒業」と同時に学位を頂きました。廣瀬、遠藤、大久保と、３代の主任教授がご配慮下さった国費留学生の研究を、野村教授のお力でまとめられたことは、私にとって生涯の財産です。ただひとつ無念なことは、先生がご体調をわるくされ、直接御礼申し上げる機会を逸したことでした。

折々に先生にご指導を頂いた「医療心理学」の視点は、これからの医療に欠くべからざるものであると確信しております。ここに、野村教授への心からの感謝を改めて申し上げるとともに、先生が礎を据えられ、現在吉川栄省教授に引き継がれた医療心理学教室の揺るぎない発展を心から願うものです。